

マタイによる福音書2章1節—12節 「主イエスが私たちを導いてくださる」

2025年12月14日(主の日) 藤沢北教会主日礼拝

川崎恵 (神奈川連合長老会個人加盟)

私たちは今、主イエス・キリストの御誕誕を待つアドベントの季節を歩んでいます。

今から二千年前のクリスマスに、ユダヤのベツレヘムというところで一人の赤ちゃんが生まれました。本当に不思議なことに、その赤ちゃんは、神の子でした。その次第は 今日の箇所の前のところに記されています。ヨセフという男性と婚約していた、まだ年若い女性だったマリアのおなかの中に 聖霊の力によって神の子が宿ったのです。驚き、動搖した婚約者のヨセフの夢に天使があらわれて告げました。「マリアのおなかの子は聖霊によって宿ったのである。その子をイエスと名づけなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

そして、聖書は告げます。 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は「神は我々と共におられる」という意味である。

神様は私たちと一緒にいたいと思われて、小さな赤ちゃんのお姿で来てくださいました。イエス様がお生まれになった。それは私たちがもう一人ぼっちではないということです。どんなに孤独な時にも、苦しいときにも、そして、喜びの時にも私たちのかたわらに主イエス・キリストがおられる。今、私たちの目には見えませんけれども、二千年前ベツレヘムにお生まれになったイエス様は、いつでも、私達のそばにおられるのです。

私達はどんなときも一人ぼっちではない。神の子が来てくださった。この方々がいつも私達といっしょにいてくださり、守り、導き、愛していくくださる。それが、クリスマスの喜びなのです。

神様は、今日、私達にこのことを伝えるために、この礼拝へ招いてくださいました。

今日は占星術の博士たちが、イエス様にお会いした記事を読んでいます。この方々は救い主に出会って、ああ、もう大丈夫なのだ。安心してよいのだ。ということがよくわかった人たちです。イエスさまが生まれたクリスマスの夜、ベツレヘムから遠く離れた東の国で、彼らは大きな光輝く星を見つけました。何だろうか、あの星は。何事が起こったのだろうと調べてみると、ユダヤの方で、私達を救ってくださる王様が生まれたようだということがわかった。

そして、ここからがこの博士たちのすばらしいところなのですが、何の疑問も抱かずに、その星を信じて、ユダヤに向かって歩きました。仕事や研究などいろいろすることがあつただろうに、その星を信じて、救い主を拝むために歩きはじめた。長い長い旅がはじまっ

た。

私達の人生も旅のようなものだと思います。子どもの時にはこんな人生になるとは思っていませんでした。これから先もどこに向かっていくのかわかりません。私たちは毎日を一生懸命生きています。嬉しいこともあれば、悲しいこと、解決しないこと、迷うこともあります。体の疲れ、弱さ、家族についての悩みもあります。その毎日の一生懸命な心の真ん中で、私たちはみな根本的な救いを求めて生きているのではないでしょうか。救われたい。安心したい。愛されたい。もう悲しみも苦しみも不安もない、安心した毎日を過ごしたい。けれども、私達の人生は自分で方向を制御できない船に乗っているようなもので、明日嵐になるのか、おだやかなのか、さっぱりわからない。それでも、毎日一生懸命生きて、夜寝て、明日を生きる。

先月、私はある方を訪れました。90代の女性で、お連れ合いはすでに亡くなり、一人で住んでおられる。その方は教会のために、同年代の女性たちと一緒に懸命に教会に尽くしておられました。でも、一人ずつお亡くなりになり、今はその方しか同年代の方はいなくなってしまった。「あの頃は本当に楽しかった。いろいろ忘れてしまったけれど。みんな亡くなってしまって。教会に行っても仲のいい人がだれもいないから、さみしいです。わたしはいつ死ぬのだろうと心配になるときもあります。でも仕方ないから、一生懸命生きているんですよ。でも、今日は恵先生が来てくださったから本当によかった。」

毎日毎日空を見上げて、真剣に星を調べていた占星術の博士たちも、本当の救いをさがしていたのではないかと思います。だから、救い主が生まれたことを知らせるとんでもない星が輝いたとき、これだ！と、すべてを捨てて、希望を抱いて星にむかって歩き出したのだと思うのです。

長い長い旅を続けて、彼らはユダヤの国に着きました。ユダヤの首都エルサレムに行ってみた。けれども新しい王が生まれた気配は全くありませんでした。博士たちは人々に尋ねました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みにきたのです。」王様が生まれたのなら、きっとお城にいるはずです。でも、町でもお城でもなんの御祝いもしていませんでした。ユダヤの国を治めているのは、ヘロデという王でした。東の国から学者たちが新しい王様に会いにきた、といううわさは、ヘロデの耳にも入りました。ヘロデ王はこれを聞いて、不安を抱いたと聖書にあります。

東方の国の博士たちが、ユダヤ人の王が生まれたと確信して、自分の国にやってきたときいて、ヘロデ王は不安になりました。

ヘロデは今の地位を築くために、やれることを全てやってきた男でした。ユダヤの王に

なるために、あっちの国に取り入ったり、いろいろな策略をして、自分の邪魔をするものは全部殺して、今の地位を築いた人でした。ユダヤ人の王が生まれたときいて、ヘロデはが不安になった。この不安は、神の力におびえるという意味の言葉です。

ヘロデは神が何かを始められたことを感じ取りました。ヘロデは聖書に詳しい学者やユダヤ教の詳しい祭司長たちを呼び出し、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただしました。

彼らは聖書の言葉を王に告げました。6節で旧約聖書のミカ書の言葉を伝えます。「ユダの地、ベツレヘムよ。」「お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となる」メシアが生まれることになっているのは、ユダヤのベツレヘムです。

自分をおびやかすようなことがはじまるのかもしれない。ヘロデ王は、東の国からやってきたという学者を呼びました。いつ、その不思議な星はあらわれたのか。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう。」と言いました。拝む気はありませんでした。見つかったらすぐに殺そうと考えていました。

私達の人生が不確かであり、毎日何が起こるかわからないことは不安なことです。しかし、ヘロデのこの行動からわかるることは、もし天地万物を造られた神が何かをはじめられたとしたら、それは私達にとって、とても恐ろしいことだということです。

昔から日本の人たちは山や木や海を神として拝んできました。なぜならそれは自然の力が恐ろしかったからです。自然は私達にたくさんの恵みをもたらしてくれます。でも、いつも山や海は私達に幸せをもたらすわけではありません。嵐が起これば船は転覆します。冬になれば山は雪がつります。雪崩の危険や凍死の危険もあります。今年は山に住んでいた熊があちこちの住宅街に出て、被害がでています。だから、人は山や海がいつもおだやかでいてくれるようにと願って、山や海を神としてあがめてきたのです。

しかし、聖書が語る神は、天地万物を造られた神です。山や海だけではない、宇宙のすべて、神がおられる天、私たちがいる地のすべてを造られた方です。神様にとって私たちは、神様がふっと息を吹けば、死んでしまう小さな小さな存在です。神が何かを始められる。それはおそろしいことです。

ヘロデは、自分を守るために、ユダヤ人の王として生まれた子供を殺そうと思いました。この不安から解き放たるために、王である自分に危険が及ばないうちに、子供のうちに殺してしまおう。この占いの学者に赤ん坊を探させて、見つかったらすぐに殺してしまおう。

ヘロデが敏感に感じとったように、神は本当に私達人類に、いや、全宇宙に大いなることをはじめようとされていました。でも、神は大いなる力で何をはじめられたか。

真の愛、神の愛を成し遂げようとしてくださいました。

　　私たちを真の愛で愛してくださる神は私たちを　真に愛するために、人間として生まれ、私たちのところに来てくださいました。私達とおなじ体を持ち、言葉を話し、ごはんを食べ、働いて生きる、そのような姿になって、私達のためにすべてをささげて愛し、そして、どんなときも、わたしたちと一緒にいることができるようになつたといふと思われた。

　　それが、あの星が教えたベツレヘムで生まれた赤ちゃんでした。おだやかに母マリアに抱かれている赤ちゃんは、天地万物を造り、私達に命を与えてくださった神でした。その神が人間としてお生まれになつた。とっても不思議なことで、私はこのことを説明する言葉がみつかりませんけれど、神様はイエス様として私達のところに来てくださって、マリアがイエス様を抱いているように、私達は神様を抱きしめ、ずっとこれから生きていくことができる、いや、イエス様に私達が抱きしめられて生きていく、幸せな歴史を神様ははじめられたのです。

　　救いをもとめて星を見上げて生きていたあの学者たちにこのことを教えるために、神様はもう一度あの不思議な星を輝かせました。ヘロデはその邪魔をしようとしているけれど、神様の愛を踏みにじろうとしているけれど、神様はそんなことお構いなしに、すべてを導いてくださいました。もう一度輝きのぼった星は、学者たちを導くように動きだしました。こっちにおいて。学者たちは素直に、わくわくしながら星についていきました。そして、星は一つの家の上でぴたりと止まりました。そのとき、学者たちはその星を見て喜びにあふれたと書いてありました。ここだ、ここなんだ。星を見ていたら、うれしくてうれしくてたまらなくなつた。神様はいる。ここにいる。大きな喜びに胸がいっぱいになりながら、その家に入ってみた。するとそこには、母マリアと一緒に生まれたばかりの赤ちゃんがいた。この方が救い主なのだ。私達の王となってくださいるのだ。もう大丈夫なのだ。うれしくてうれしくて学者たちは、大切な大切な宝物をささげて、イエス様の前にひれ伏しました。どうして、学者たちがこの赤ちゃんを救い主だと信じることができたのか聖書は何も語りません。ものすごく大きな喜びにあふれたと記しているだけです。うれしくてうれしくて、もう大丈夫だ。この方が救ってくださる。この方が私達のところに来てくださったからもう大丈夫。だから、すべてをささげてしまった。この宝物は彼らが占星術に使っていたものだという説もあります。定かかどうかはわかりません。しかし、彼らは、この幼子が自分たちの王様になる方だと信じ、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげて、ひざまずいて拝みました。そして、自分の国へ帰っていきました。

　　私たちも神に導かれて、ここに招かれました。神はすべてを用いて、大いなる力をもつて、私たちをこの教会に連れてきてくださいました。今までいろんなことが私たちそれ

それにありました。つらいこと、悲しいこと、うれしいこと、その全てのとき、神様はわたしたちをみておられました。そばにおられました。

あなたのそばに私はもういる。私があなたがたすべてを救い、神の国に導く。あなたを愛している。神の子は私たちのもとに来てくださいました。そして、今日もそのことを私たちに語りかけるために、私たちをここに集めてくださいました。

この日お生まれになったイエス・キリストはやがて大人になられて、ヘロデのように自分の欲望にひきずられて滅びに向かう私達を死の力から救うために、わたしたちのかわりに十字架におかかりになり、私達をゆるしてくださいました。そして、私たちが神に赦されて、天国に入る道を開いてくださいました。十字架におかかりになったイエス・キリストは死からよみがえり、生きておられます。目にはみえませんけれども、イエス・キリストはわたしたちのそばにおられます。あの日輝いた星のように、神様は私たちの心を天の光で照らしてくださいます。その光はイエス・キリストです。

あなたは一人で生きていくのではない。私が一緒にいる。ヘロデがどんなに神様の邪魔をしようと思っても無駄だったように、これから的人生、やっぱりいろんなことがあると思いますけれど、その全ての出来事をとおして、イエス様は私達を神の国へと導いてくださいます。

学者たちが星に導かれた。これからは主イエス・キリストが私たちを神の国へと必ず導いてくださいます。わたしたちが悲しいときには共に悲しんでくださいり、慰め、励まし、すべてのことから守り、神の国へ導いてくださいます。

私たちは今朝も礼拝へと招いてくださいました。

ベツレヘムのあのイエス様が生れた家のように、ここは救い主がおられるところです。ここは救い主のお声をきくことができるところ。あの不思議な星のように天の光が輝くところ、私たちが天の国に導かれる場所なのです。だから神様はわたしたちをここに招いてくださいました。そして、もう大丈夫。いつでも私はあなたと共にいる。私があなたを導くと語りかけてくださいます。ですからイエス様を信じて、ついていけばよいのです。自分の力で頑張る必要はない。恐れる必要もない。たくさんのものを溜め込む必要はない。わたしたちもすべてをささげて、イエス様の前にひれふすとき、全てが救いにむかって動き出すのです。

それがクリスマスの喜びなのです。

インマヌエル 私たちと共にいてくださる 主イエス・キリストが私たちを導いてくださいます。お祈りします。